



おまんこ

汗  
だく  
女  
スパイ

任  
務  
記  
録

ストーリー付きCG  
総ページ数70ページ



汗

だく女スパイ  
任務記録

あ  
「はあ、はあ……  
かったわね!」

「もう快感で、」

はあ  
「はあ、  
身動きできないはずよ」



## CHARACTER

【chloe】  
クロエ

私の技術、味わってみる？

時幾多の男を魅了してきた女スパイ。  
誘惑から暗殺まで、多くの技術を体得している。  
一方で、非常に大人な不満を抱えているという噂。



B92  
W58  
H90



「はぁ、いい、団長。  
お仕事熱心ね。  
ちよつと息抜きしない？」

私室で執務しているとクロエが訪ねて来た。  
会話をしつつ俺の肩に触れ、  
なまめかしく身体をすり寄せてくる。



「团长には命を助けてもらったしね。  
今日はお礼をしに来たの。  
受け取ってくれるでしょ？」

クロエは、話しながら俺の服を脱がせてきた。  
流れるような素晴らしい手際だ。  
これがスパイの技術か。

彼女の男を誘惑する技術とやらには興味がある。  
少しばかり陰謀めいたものも感じるが、  
彼女の企みに乗ってやるのも一興だろう。



「ふふ、団長は素直ね。  
おちんちんもすごく硬くなってる。  
私のここに入りたいのね？」

クロエはレザースーツのジッパーを下から開き、  
女性器だけを露出した。

クロエは熱くヌルヌルとした性器を、  
俺の亀頭に近づけ、ねっとりとした擦りつけた。

女性器はすでに粘液に覆われ、  
半透明なツヤを帯びている。



「んう、ふあ……ねえ、どう？  
おまんこのピラピラが、グチユグチユ絡みついて  
おちんちん、気持ちいいでしょ？」

技巧の限りを尽くした腰使いで  
熱いらびアを亀頭にまわりつかせ、  
クロエは肉棒に強烈な快感を送り込んできた。

ふー

ドキ、ドキ。

だが、男を籠絡するスパイの誘惑技術が  
ここまでストレートな肉弾戦とは予想外だ。  
俺の驚きを見透かしたのが、クロエが微笑する。



「ゆっくりおしゃべりでもしながら、  
相手を夢中にさせるとでも思った？  
ふふ、もっとグチユグチユしてあげるわ」

ピクッ

ふー

クロエの腰がさらにいやらしくうねった。  
ぬめる肉ひだが亀頭に絡みつく凄まじい快感。  
俺は虜となり、体を動かす事もできない。

ドッ

と、クロエは突然、  
口元に笑みを浮かべた。

ふー





「はあ、はあ……かかったわね！  
もう快感で、身動きできないはずよ」

ピクッ

ふー

ふー

ピクッ  
ピクッ



「あなたは……んっ、抵抗もできずに  
私に暗殺されるの、はあぁっ……」

ぴんっ

ふー

ふー

ピキッ、  
ピキッ、



「この暗殺術ね、自分も気持ちいいのを  
我慢しなきゃならないから、あああつ……」

ピクッ

ふー

ふー

ドキ、  
ドキ、



「だから、ほんとには……んっ、  
やりたくないのよね……  
はう、んああっ……!」

ピクッ

ふー

ふー

ピクッ、  
ピクッ、  
ピクッ!

「それに、あなた、すごくいい人だし……  
でも、これで終わり……さよならっ……！」

俺の命もここまでか。  
そう思った瞬間、雄の本能で身体が動いた。  
このまま子孫も残さずに死ぬことはできない。

ピリ

ふー

ドキ、  
ドキ、

目の前の子宮に精液を注がねば。  
快感の檻を破ってクロエに掴みかかった俺は、  
衣服をはだけさせ、豊満な乳房を揉みしだいた。



「ひいあああつ…… やつ、あああつ……  
どうして……んつくう…… 完璧だったのに、  
なんで動けるの……ああ、んはああつ……」

ズルッ

クロエを抱きたい衝動を抑えきれなかつたと  
素直に説明すると、さらに艶めかしく喘いだ。

ヒクッ

ゴッ

ぬっ

その声をもっと聴きたいと、  
硬くなり始めていた乳首をいじくる。



「あああ……ちくびい……」  
「コリコリだめえ……」  
「感じすぎちゃう……」  
「はあ、あああんっ！」

表情も身体の反応も、先ほどまでとは  
まったく違うものになっている。

ズンッ

ゴゴゴ

ビクッ

ぬっ

強かな暗殺者の顔は消え去り、  
嘘のように雌の一面を見せ始めた。





「んっ、はあ、ああ……ねえ、突いて……っ！  
あなたのおちんちんを……  
おまんこの中に入れてほしいの……っ！」

ズルッ

んっ

んっ

んっ

んっ

「もっと……愛撫だけじゃなくて……んはあ……  
身体の奥から気持ちよくなりなののお……  
一方的に、いじめてもいいから……っ」

ズムッ

その告白に少しばかり驚いたが、  
この肢体を抱けるならば断わる由はない。

なにが彼女をひょうへんさせたのかは  
わからないが、  
吸え善ならばいただくしかない。

おっおっ

んん

あゝ

俺はクロエの愛液で濡れた肉棒を、  
彼女の胎内に突き入れていった。





「んんんっ…… お腹の中、すたっ……っ！  
でも、だめえ……  
気持ちいいのに負けちゃ……っ」

この期に及んで、まだ殺そうと言っのか。  
あれだけ挿入をねだっていたというのに。

すちゃっ♡

んんんっ♡  
んんんっ♡

んんんっ♡  
んんんっ♡

はぁっ♡

んんんっ♡

ならば、さらなる快感を与えるほかない。  
それで、つまらない使命など捨て去るだろう。



「んはぁ、はふっ、ひあっ、ああんっ……  
奥まで、ズンズン来て……っ！」

すちゃ

はぁ

はぁ

はぁ

あぁ...

はぁ

すちゃ



「殺さないで、いけない……のに……っー  
気持ち、よくてえ……はあ、んっ、あっっ  
んふ、ひあっ、はんっ、あああっ……っー」

同性でも羨むような乳房を揺らしながら、  
クロエは快感に悶えていく。

すぢゃ  
すぢゃ

くわっ  
くわっ

！！  
！！  
！！

はあっ

くわっ

くわっ

葛藤「そ見せているもの、  
このまま快感に流されると見て  
間違いないだろう。」

む



「ひっ、はああ、あ、んあああつ……  
むりい……もう、  
この人を殺すことなんて……っ！  
もっと欲しくて……っ！」

すぢゃ♡

♡  
♡  
♡

♡  
♡  
♡

はあっ

♡  
♡

♡  
♡

ああ…♡



「ねえ……もっとお……私のごと、全部  
あげるから……はあ、んんっ……  
もっとお、ジュポジュポ、してえ……っ！」

すぢゃ♡

♡ちゅ♡  
♡ちゅ♡

!!  
!!  
♡

はあっ

♡ちゅ♡

♡ちゅ♡

言葉どおり、このまま彼女のすくすくも  
もろっってしまうのもいいだろ。……  
抽送を速めて、締まる腫を……めっへっ。



「ふあっ、あっつ、  
んあっ、あああつっつっ  
また、激しく……っっ……」

す  
ちゅっ♡

はあっ

はっ♡

はっ♡

!!  
!!  
♡

はっ♡  
はっ♡

ああ…♡



「いっばい、感じてたのに……っ！  
ひあっ、ひう……あああう、あんう……  
もっと激しくなるなんて……っ！」

すちゃっ♡

♡ちゅっ♡  
♡ちゅっ♡

！！！！♡

はあっ

♡ちゅっ♡

♡ちゅっ♡

汗を浮かべ、喘ぎ声をまき散らすクロエ。  
ただただ淫らで、暗殺を企てていたスパイとは思えぬ姿に変貌している。





「あなたには、全部話してあげる……っ  
洗いざらい、本当に、全部……っ」

すちゃっ♡

はぁっ

♡ん♡

♡ん♡

!!  
!!  
♡

♡ん♡  
♡ん♡

訴えるようにそう伝えてくるぞ…  
本当にすべてを口に始めた。



「私は……んくあつ……海賊に調教されて……  
スパイになったの……はあ、ふう……  
だから、海賊に恨みがあつて……」

すぢゃ♡

はあ

はあ♡

はあ♡

はあ♡

はあ♡

ああ…♡



「それで、色んな海賊団に潜入して……  
ひい、はあ、んはあ……そこの首領たちを  
狙ってたの……っ」

すぢゃ♡

はあっ

はあ♡

はあ♡

はあ♡

はあ♡

この船に潜入したのも、それが目的なのか。  
たすねると、すぐに首肯した。



「そっ……だけど、もうそんなことは  
どうでもいい……いまは、あなたと  
気持ちよくなりたいの……っー」

す  
ちゃ♡

はあっ

♡  
♡

♡  
♡

!!  
!!  
♡

♡  
♡  
♡

ああ…♡



「全部喋ったんだから……はあ、はあ、  
私のお願いを、聞いて……っ！」

すぢゃ♡

!!!

♡  
♡  
♡

!!!

♡  
♡

はあ

♡  
♡

なにを望むのかたずねた。  
返ってきたのは予想とおりの答えだった。

わあ…♡



「あなたの熱いのを注いでもらえたら……  
私は、なんだってするから……っ！」

その申し出を聞いた瞬間、  
亀頭の先がひと際熱を持った。

すちゃっ♡

♡ちゅっ♡  
♡ちゅっ♡

♡ちゅっ♡  
♡ちゅっ♡

はぁっ

♡ちゅっ♡

♡ちゅっ♡

クロエの中は呼応するかのようによろめくように  
うねり始め、苛烈にペニスを絡んでくる。





「イクっ……んあつ、イクうっ……  
精液、ちようだい……っ……  
子宮に、どっぶり注ぎ」……っ……っ……

すちゃ

はぁ

ちゅ

ちゅ

！！！！

ちゅ  
ちゅ

あぁ…



「ああああ……っつ！  
あついい……っつ！  
おまんこのなかあ、溶けちゃいぞお……っ！」

膣肉にまでおねだりされながら、  
クローエの最奥部で吐情した。

クローエ……

おまんこ

はぁっ

おまんこ

よほど精液が欲しくていたのか、  
クローエは腰に足を絡めてまで  
俺を拘束しようとしている。



「はあ、はあ、はあ……んああつ、  
ねえ、出してくれたってことは……  
この船にいいいいってことだよわ……？」

快感の余韻に浸りながら、問いかけてきた。

「はあ……」

「はあ……」

「はあ……」

「はあ……」

クロエの提案を受け入れよう。  
海賊への恨みを捨てた今、  
彼女ほどの逸材を逃す手はない。



「ありがとう...でも、ご褒美はもらおうからね。  
一流のスパイは、報酬なしじゃ雇えないのよ?」

ゴッゴッ  
ゴッゴッ  
ゴッゴッ

はぁ...

はぁ...

はぁ...

そう言うときクロエは、陰門を強烈に絞め上げた。  
彼女の中に入ったままの肉棒が刺激され、  
再びムクムクと怒張し始める。



「あなたに忠誠を尽くすわ。  
だから、もっともっとならば褒美ちょうだい。  
まだ、ぜんぜん足りないの」

スパイによる暗殺の危険は去ったが、  
体力の限界は迫っている。  
俺は別の意味で、命の危険を感じ始めていた。







「ただいま戻りました。  
標的の情報、手に入れてきたよ」

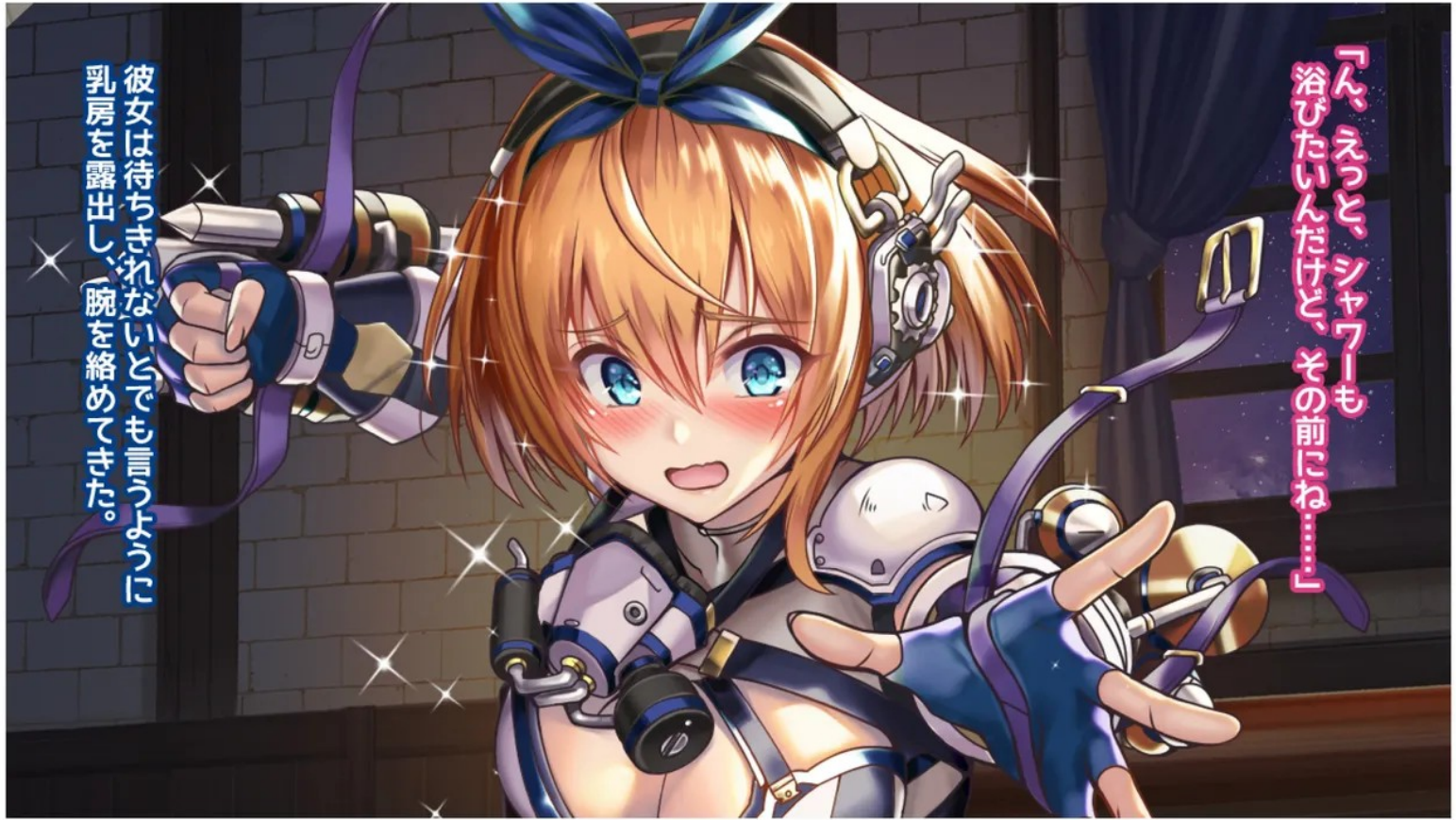
諜報活動から戻ったクロエを出迎えた。  
今回は長期の任務だったので、  
彼女の表情にも少し疲労が見える。

レザースーツは蒸れて不快だろう。  
まず、シャワーでも浴びると勧めた。



「ん、えっと、シャワーも  
浴びたいんだけど、その前にね……」

彼女は待ちきれないとしても言うように  
乳房を露出し、腕を絡めてきた。

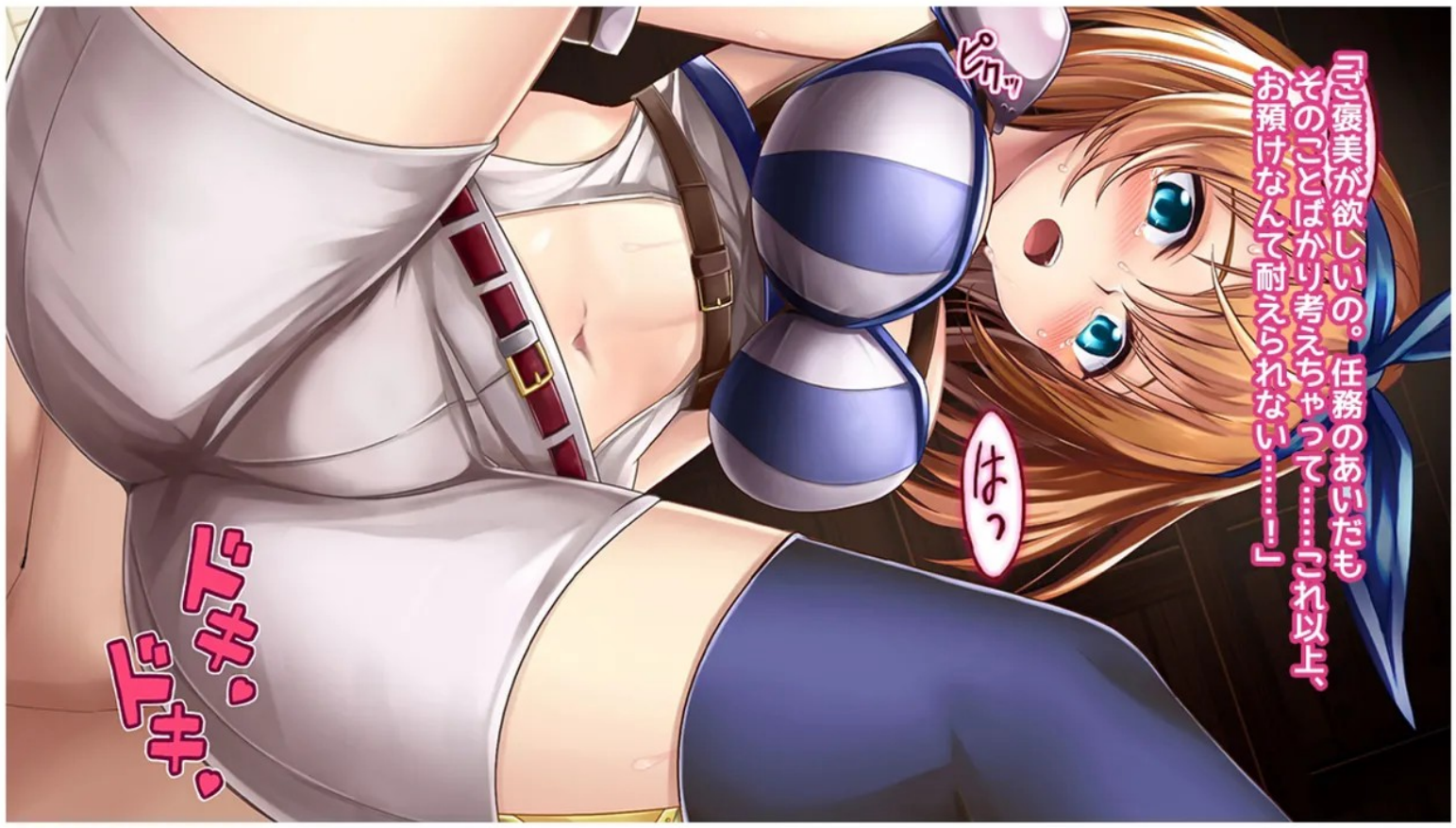


「ご褒美が欲しいの。任務のあいだも  
そのことばかり考えちゃって……これ以上、  
お預けなんて耐えられない……」

はっ

ぴゅん

ゴキ、ゴキ、  
ゴキ、ゴキ、  
ゴキ、ゴキ、



「報酬をちようだい。あなたの熱い精液を、おまんこの中に注いで欲しいの」

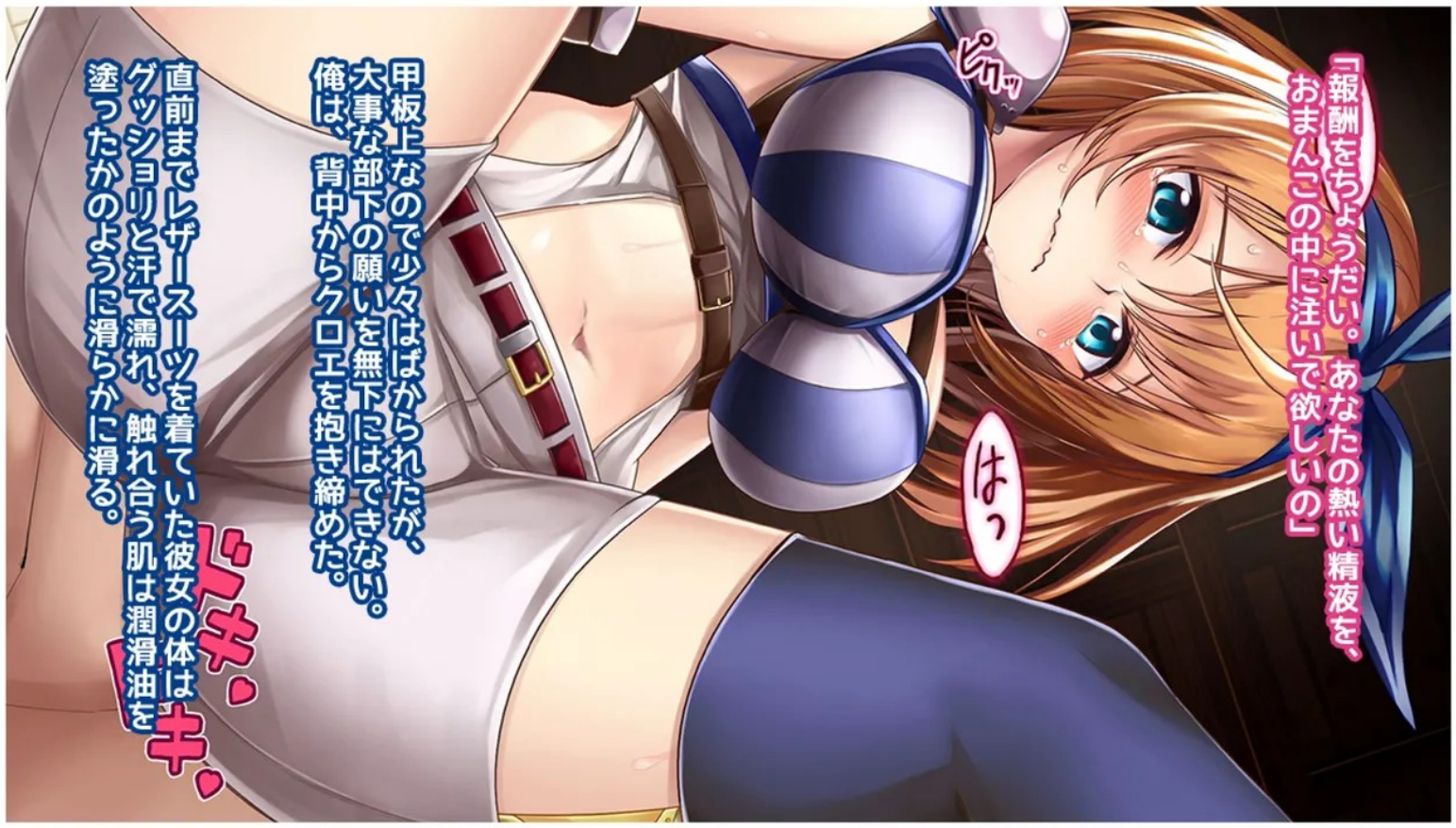
はっ

ぴゅっ

甲板上なので少々はばかられたが、大事な部下の願いを無下にはできない。俺は、背中からクロエを抱き締めた。

直前までレザースーツを着ていた彼女の体は、グツシヨリと汗で濡れ、触れ合う肌は潤滑油を塗ったかのように滑らかに滑る。

どきどき



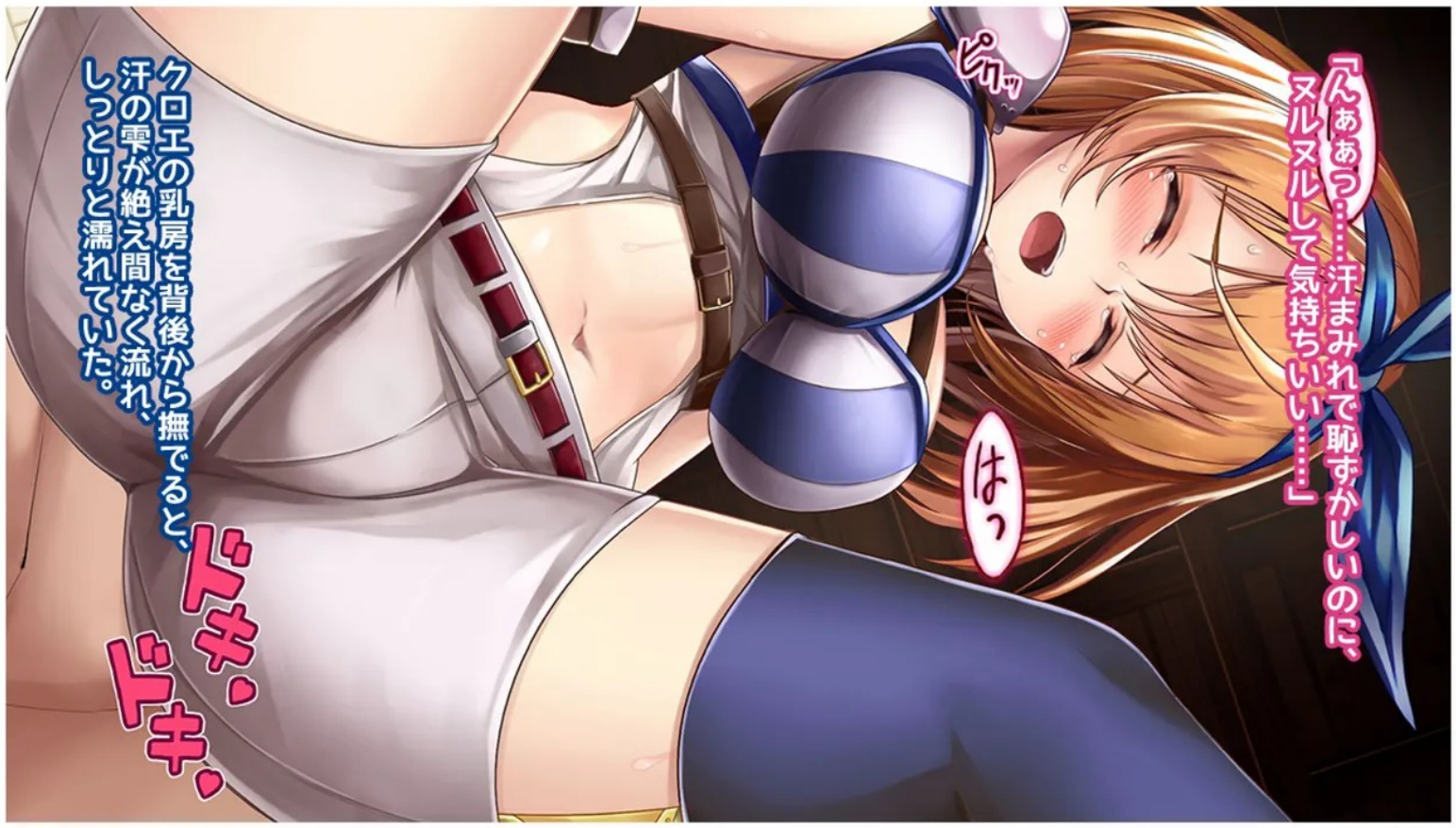
「んあぁっ……汗まみれで恥ずかしいのに、  
ヌルヌルして気持ちいい……」

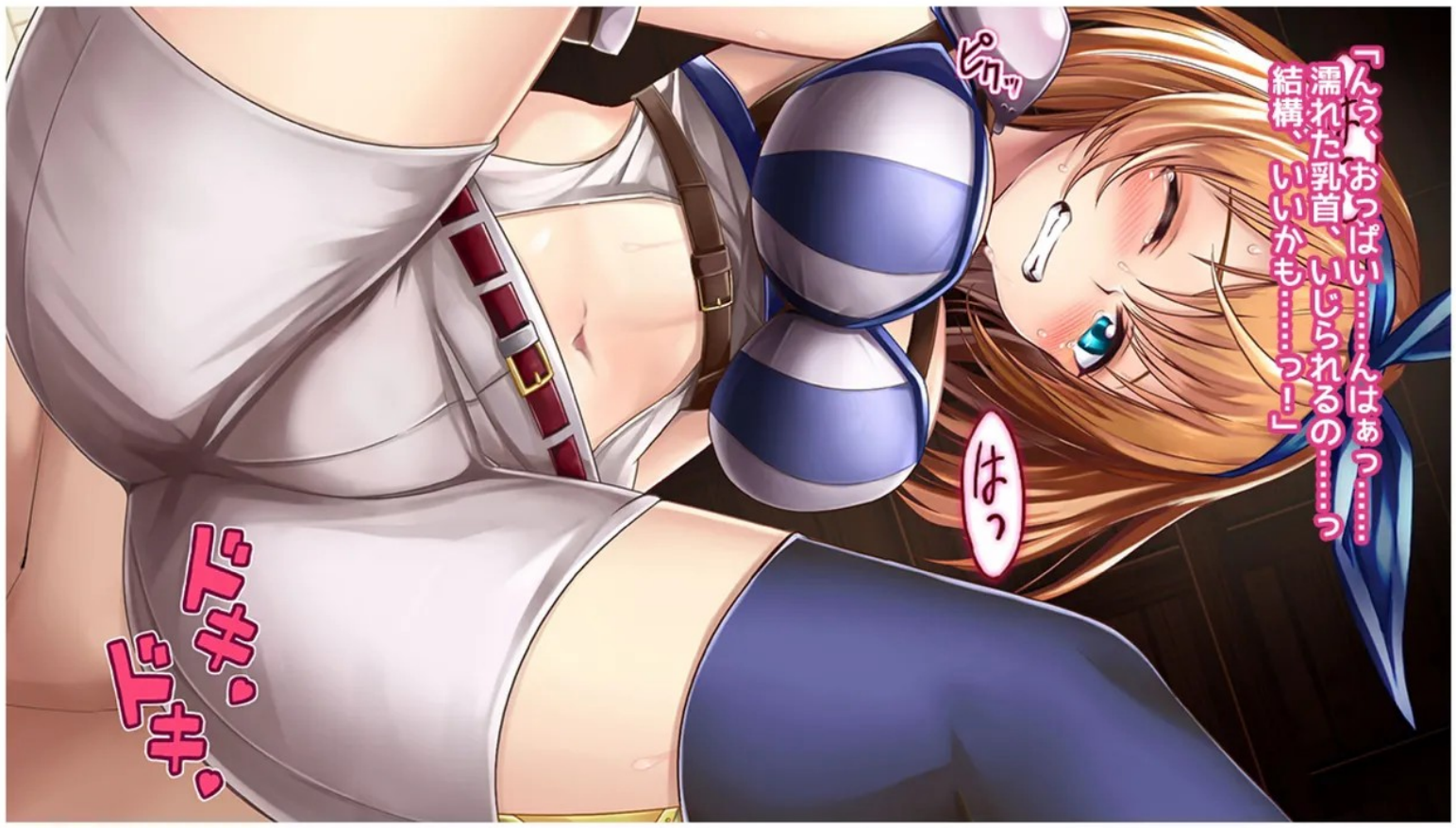
はっ

ぴゅっ

クロエの乳房を背後から撫でると、  
汗の雫が絶え間なく流れ、  
しっとり濡れていた。

ドキ、ドキ、  
ドキ、ドキ、

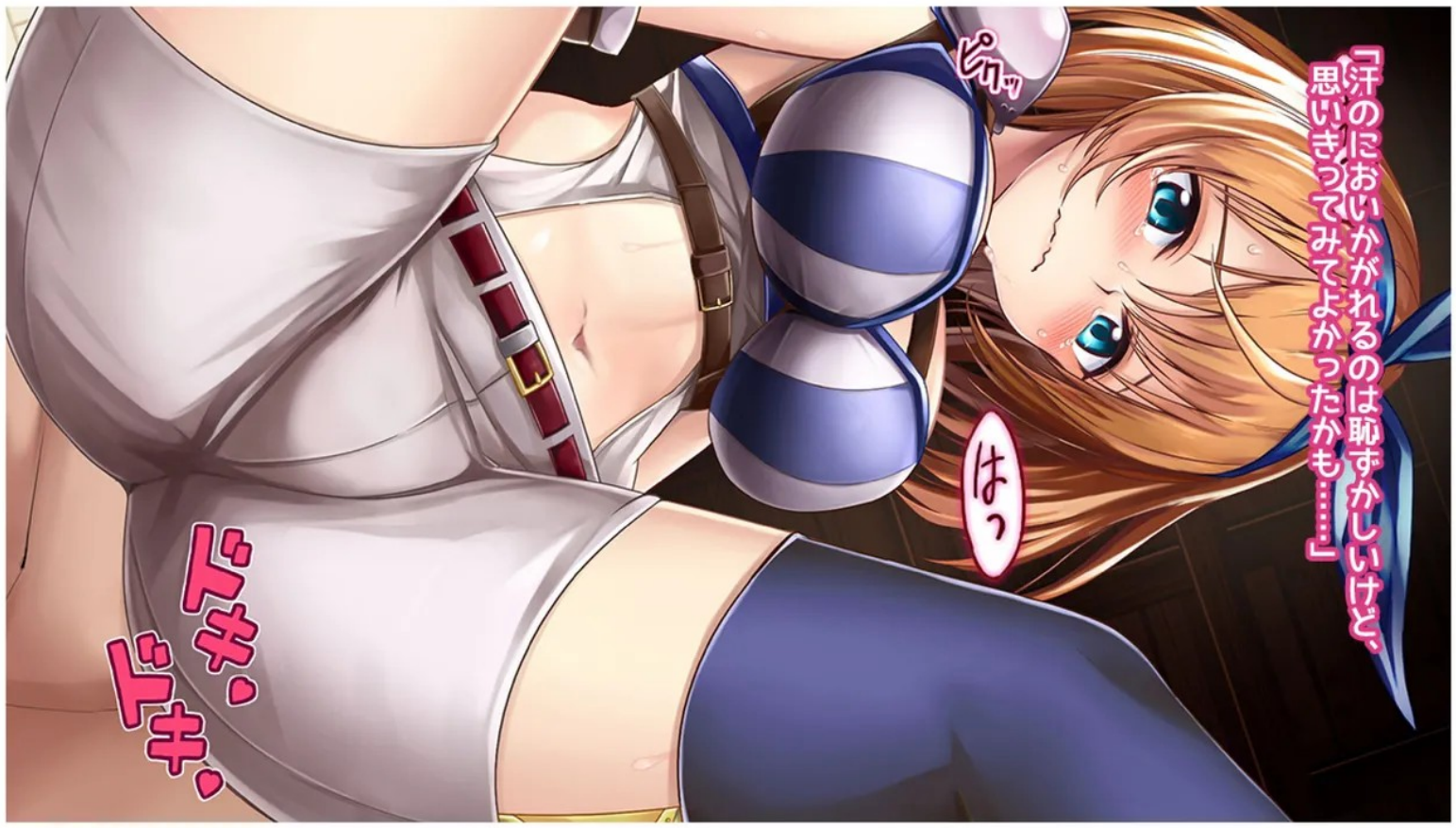




「んう、おっぱい……んはあっ……  
濡れた乳首、いじられるの……っ  
結構、いいかも……っ」

はっ

ゴキ、ゴキ、  
ゴキ、ゴキ、  
ゴキ、ゴキ、



「汗のおいかがれるのは恥ずかしいけど、  
思いきつてみてよかったかも……」

はっ

ぴゅ

ピュ、ピュ、  
ピュ、ピュ、

「これから、任務後は、汗まみれのまま  
ご褒美セックスがいい……っ！」

はっ

蒸れた着衣の中に汗の樂園を発見した俺は、  
さらに湿度の高い奥地の熱帯を求めて  
レザースーツのジッパーを引き下げた。

濡れ光る女性器が剥き出しになり、  
スーツの内部で熟成された汗と愛液の薫りが、  
雌のフェロモンをはらんで立ち昇る。

ドキ、ドキ、  
ドキ、ドキ、





「すっく、いやらしいにおい……私の汗と「おまんこ」汁のにおいが混ざってるっ」

ヒクッ

クニッ

ピクッ



「いあぁっ、んっ、恥ずかしいのに  
気持ちよくなってたまらない……っ!」

アッ!?

ヒクッ

ピクッ

クニッ

「ねえ、団長、私のおい好き……？」  
「任務中、すっ」と団長のことを思っ流してた  
この汗と愛液のにおい……」

ヒクッ

クロエの言葉に深く頷いた。  
そして鼻先を彼女の汗ばんだうなじに埋め、  
咽がえるような性臭を肺いっぱい吸い込む。

ヒクッ

興奮のままに自らの穂先を  
膣口にあてがい、一気に奥まで突き入れた。





「でも、おちんちんだけじゃなくて……  
団長のおいも欲しい……私のいやらしい  
混ぜたら、絶対気持ちいいと思う……」



「もつとヌルヌルになって  
エッチになって……  
いっぱい……んはあ、  
ああう……楽しもう……」

クロエの内部が激しくうごめく。  
スパイ技術ひとつだろうか、彼女の体内は  
男を骨抜きにするかのように  
鍛え上げられていた。

膣壁にはコリコリとした無数の肉ひだが刻まれて  
おり、亀頭が通り過ぎるたびに、軟体生物の  
群れが絡みついてくるような感触がある。

あはは

あはは

クロエを絶頂に導く前に射精してはならない。  
快感のご褒美を彼女に与えるべく、  
射精感を抑えながら腰を振る。





「あああんっ……団長が動くとき……ひあう……汗と愛液が、又キユ又キユして……気持ち、いいのお……もっと、擦りつけて……っ！」

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

「団長が、グチュグチュするたびに、私のいやらしいにおいが濃くなって……んっ、あぁ、はぁう、あぁう……っ」

滴るほど流れるクロエの汗は俺の全身を濡らした。

互いにびしょ濡れになった状態で、水音を立てながら高まっていく。

ぐちゃぐちゃ

ぐちゃぐちゃ

ぐちゃぐちゃ



「あっあっあっ……！  
んあっ、ひう……！  
ちようだい……熱くてトロトロの精液を……  
子宮の中にい……注ぎ込んでええ……っ」



クロエの射精を促す切ない叫びが広がり、  
そのたびに俺の中の射精感が高まる。







「エッチなおつゆ……いっぱい垂れて……  
においもすごい……んああ、はああ……  
このにおい、エッチすぎるう……っ」

ぷんぷん

ぷんぷん  
ぷんぷん  
ぷんぷん

クワエの鎖骨から首筋にかけて  
流れ落ちる汗をペロリと舐めた。



「そんな、舐めるなんて……っ！  
ぞ「ままでは、私も……んっ、ああああっ！」

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

舐められて興奮したのか、  
クローは全身を震わせ始めた。











「んあああああつ……  
中に……来てるう……」

♡♡♡  
♡♡♡

んんん

んんん

ゴッゴッ

んんん  
んんん

けいれんする彼女の膣奥で射精し、  
子宮へと精液を注入していく。



「ああああつ……団長の精液で、  
お腹の中を満たされてる……っ！」

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

「においも、エッチになつて……  
私の汗と愛液が、団長のにおいと混ぜつて……」

♡  
おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい  
おっぱい

おっぱい

恍惚の表情を浮かべるクロエ。  
どっちら、寝美に満足してへくれたらどう。





「はあはあはあ……  
すっごくよかつたあ……  
ねえ、今度は団長も汗だくでしよつよ……」

ゴッゴッ

ゴッゴッ  
ゴッゴッ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

どっせなら、  
団長もレザースーツを着てみない……？  
私が用意しておくから……！

レザースーツ

レザースーツ

レザースーツ  
レザースーツ

ゴッゴッ

いかに忠実で優秀な部下の頼みでも、  
それだけは御免被らう。





